南宋期の地域社會における「友」

岡　元司

一　問題の所在
二　「友」の用例
三　「友」の性格
四　地域社會における「友」
五　結　語

一　問題の所在

一九九五年、浙江省溫州市甌海區郭溪鎭梅園村で六方の墓誌が出土した。張煇（一〇七七～一一三二）の墓誌とその篆蓋、張煇の妻である趙氏・曹氏の墓誌、張煇の子である張孝愷（一一一〇～一一六七）の墓誌、そして張孝愷の妻趙氏の墓誌である。これらについては、既に王同軍氏による紹介がなされており、そこに全文が紹介されている。[1] これらの新出土墓誌は、南宋期溫州を中心に獨自の思想を展開させていた永嘉學派の中心人物の一人である陳傅良が、この墓誌の張孝愷の娘を妻としていたこともあり、宋代溫州の地域社會・地域文化を明らかにするうえで有用であるのだが、同時に、本稿との關わりにおいては、「友」という語の用例としても注目される。すなわち、これらの墓誌のうち、張煇の墓誌の中で、撰者である工部尚書の劉嗣明[2]が、張煇のことを「吾が友張子充」（子充は張煇の字）と呼んでいる。また、張煇の墓誌の中には、若くして太學で學ぶ機會を得ながらも「禮部に於いて利あらず」、つまり進士及第を果たせなかった張煇が地元での

どのような生き方をしていたかを述べた下りで、「朋友の艱急疾病には賙卹拯救す」などと記されており、地域社會において「朋友」との關係を重んじていた者として描かれている。

ではなぜこの「友」という語に注目するかを説明しておきたい。傳統中國社會における人的結合は、親子關係や君臣關係などの垂直的なものだけでなく、たとえば、古くは春秋戰國時代から漢代の社會に增淵龍夫氏が見出した任俠的紐帶[3]から、清代では曾國藩の湘軍に見られた幕友の平等主義[4]などに至るまで、多かれ少なかれ水平的な傾向を含んださまざまな人的結合も見られていた。とりわけ近年の歷史學においては、固定的な集團よりも、柔軟な社會的結合を取り上げて論じられることが多くなってきているが[5]、單に「同じものが中國にも見られる」式の理解ではなく、今後は、傳統中國社會に獨自の人的結合の論理を見出していく作業も必要とされてくるであろう。その意味では、たとえば、貴族制社會の士大夫のサークルにおける「輿論」[6]であるとか、あるいは、明淸時代における善擧のための廣範なネットワークを支えた「徵信」原理（公開原理）[7]であるとか、そうした傳統中國社會において實際に用いられた用語から、問題を構築していく必要があるように思う。そして、本稿で「友」を取り上げるのも、以上のような目的意識によるものである。

さて、「友」の關係がどのような役割を果たしてきたかを社會史の視點から分析した研究は、これまで決して多くないが、明末から淸代の時期にきわめて重要な意味をもっていたことについては、ジョセフ・マクデモット氏[8]、小野和子氏[9]、小川晴久氏[10]が變革期の政治運動とも關わらせながら論じている。さかのぼって宋代においては、明末の東林黨の場合のように君主へ公然たる批判の論理として「友」が強く意識されていたわけではなかったが、それでも、宋代社會全體において人々の交際が活發化するのにあわせて、多くの思想家や士大夫たちが、前代までに比べて格段に「友」の關係を重視するようになった時期にあたっていた[11]。

筆者はこれまで、宋代に永嘉學派の母胎となった溫州を地域社會史の角度から扱ってきたが[12]、とくに溫州出身のエリートたちの人閒關係に關する史料においても、この「友」という用語が頻出する。そこで本稿では、宋代の地域社會におけ

る人的結合のあり方を探る一つの材料としてこの「友」に注目し、とりわけ南宋期に諸學派が地域的に分立しているという狀況[13]の中で、「友」による人間關係がどのような社會的意味をもっていたのかについての具體的な事例として、溫州出身のエリートをめぐる「友」關係を分析してみたい。

二　「友」の用例

さて本稿では、主として墓誌によりながら分析を進めたい。[14]唐代から宋代にかけては、墓誌の記述のあり方が大きく變化した時期にあたる。たとえば、中砂明德氏は、唐代中盤以降、撰者と死者の人間的な繋がりについての記述や、死者と關わりをもった人々の名前が頻繁に出てくるようになることを指摘している。[15]また、ビバリー・ボズラー氏は、墓誌等のレトリックにおいて、唐代から宋代にかけてしだいに、先祖による特權よりは、努力や業績といった個人の行動が強調されるようになった變化を指摘している。しかも北宋から南宋にかけては、墓誌を執筆される側の傳主の變化としても表れ、宮廷の官僚から地域社會のエリート層へと對象者が擴大していった。[16]

本稿で主たる題材として扱うのは、南宋期溫州の代表的な士大夫である王十朋（一一一二～一一七一）、薛季宣（一一三四～一一七三）、陳傅良（一一三七～一二〇三）、葉適（一一五〇～一二二三）の撰した墓誌である。

このうち、とくに葉適は、韓侂胄（一一五二～一二〇七）の北伐失敗により南下侵攻してきた金軍に對して知建康府・沿江制置使として防衛に盡力したものの、韓侂胄殺害後に落職し、嘉定元年（一二〇八）には鄉里の永嘉縣水心村に戻り、以後、『習學記言序目』をまとめるとともに、墓誌・祭文などの執筆活動を精力的に續けた。當時としては比較的長命であり、しかも晩年に鄉里で時間的餘裕のある中で生活したことなども重なり、彼の文集には數多くの墓誌が殘されている。それらの墓誌を收めた『水心文集』[17]に序を記した門人趙汝讜は、葉適の墓誌等の執筆について、「昔、歐陽公、碑銘を獨壇し、其の世道の消長進退に於いて、其の當時の賢き卿大夫にして功行あり、以及び、閭巷山巖の樸儒幽士の隱晦にして

未だ光かざる者の與に、皆な焉れを述べ、史を輔けて行られ、其の意は深し。此れ先生の志なり」（「水心文集序」）と述べ、多數の碑誌や序記を撰して文學史上に大きな役割を果たした北宋の歐陽脩（一〇〇七～一〇七二）[18]がかくれた人材にまで墓誌の執筆對象を廣げたことを、葉適が「志」として引き繼いでいるものとして位置づけていることになる。

ただし、こうした不遇の者をも歐陽脩が積極的に扱ったとはいえ、『居士集』に收められている墓誌の壓倒的多數は、表面的な身分の點からみると、何らかの形で官職・官位を得たことのある人物ばかりで、女性と宗室を除いた計六十首の墓誌・墓表・墓碣のうち、官職・官位と無緣であったのは、卷二十四「連處士墓表」の一首にすぎない。この點でいえば、墓誌の傳主百五十四名から女性を除いた計百二十八名のうち、無官の者を二十八名（二二・八％）も含んでいる葉適の場合[19]の方が、少なくとも文集に殘されているものから數える限り、より幅廣く取り上げていることになる。こうした點は、陳傅良[20]にも同樣に見られる傾向であり、個人的な差というよりは、北宋から南宋にかけて墓誌等で全體的に見られた變化として捉えたほうがよいであろう[21]。

ところで、歐陽脩から更にさかのぼって、唐宋八大家の筆頭に擧げられる韓愈（七六八～八二四）も、多數の墓誌を執筆したことで知られるが、葉國良氏によると、墓誌の題において墓主をただ「字」で呼ぶことは、韓愈に始まったことだとされており、それらは「同調」「至友」に對して用いられていると指摘している[22]。題に「字」を用いることは、歐陽脩『居士集』においても見られ、女性・宗室以外の六十名のうち、ちょうど十五％にあたる九名が字で呼ばれており[23]、その相手に對しては、墓誌の序においても、「吾が友、張子野」（卷二十七）、「予の友、黃君夢升」（卷二十八）などとして、歐陽脩自身が自分の「友」であることをしばしば明言している。

このように墓誌の題に「字」を用いることは、今回取り上げる四人の溫州出身者の撰した墓誌において、ますます增加している。〔**表一**〕に列擧した題から數えると、陳傅良『止齋先生文集』の三十六首の墓誌から女性を除いた三十一首の墓誌のうち、二十二題に字が用いられており、一族に對するものを含むとはいえ七一・〇％もの割合を占めていることに

〔表一〕 墓誌の題に字が表記されている人物（字の欄の●印）

陳傅良『止齋先生文集』墓誌					
No.	巻	題	字	姓　名	官
1	47	徐叔楙壙誌	●	徐　槐	
2	47	林安之壙志	●	林居實	×
3	47	趙夫人墓誌銘		趙　氏	
4	47	胡少賓墓誌銘	●	胡　序	
5	47	承務郎陳公墓誌銘		陳　某	
6	47	叔母韓氏墓誌銘		韓　氏	
7	47	馮司理墓誌銘		馮施叔	
8	47	張忠甫墓誌銘	●	張　淳	×
9	47	章端叟墓誌銘	●	章用中	×
10	47	朱君佐壙識	●	朱興國	
11	47	宜人林氏墓誌銘		林　氏	
12	48	劉端木墓誌銘	●	劉　春	
13	48	陳子益母夫人墓誌銘		林　氏	
14	48	林民達墓誌銘	●	林　悅	×
15	48	何君墓誌銘		何　松	×
16	48	朱公向壙誌	●	朱　某	×
17	48	胡彦功墓誌銘	●	胡　勣	
18	48	承事郎徐公墓誌銘		徐迪哲	
19	48	新歸墓表	（林一族）		×
20	49	敷文閣直學士薛公壙誌		薛良朋	
21	49	陳季陽墓誌銘	●	陳義民	×
22	49	修職郎呂公墓誌銘		呂　琰	
23	49	徐武叔墓誌銘	●	徐　鉞	×
24	49	陳習之壙誌	●	陳　說	×
25	49	承事郎潘公墓誌銘		潘朝卿	
26	49	林懿仲墓誌銘	●	林淵叔	
27	50	沈叔阜壙誌	●	沈　昌	×

28	50	族叔祖元繼壙誌	●	陳　紹	×
29	50	族叔祖元成墓誌銘	●	陳　繹	×
30	50	族兄際可壙誌	●	陳　踰	×
31	50	高光中墓誌銘	●	高　融	
32	50	陳百朋壙誌	●	陳天賜	×
33	50	王道甫壙誌	●	王自中	
34	50	族叔國任墓誌銘	●	陳方中	×
35	50	洪君墓誌銘		洪　某	×
36	50	令人張氏壙誌		張幼昭	

葉適『水心文集』墓誌					
No.	卷	題	字	姓　名	官
1	13	陳少南墓誌銘	●	陳鵬飛	
2	13	葉君墓誌銘		葉　梓	×
3	13	墓林處士墓誌銘		何　傅	×
4	13	宋故孟夫人墓誌銘		仲　氏	
5	13	宋故宣教郎通判平江府姚君墓誌銘		姚　穎	
6	13	將仕郎嵇君墓記		嵇居易	
7	13	宋杜君墓誌銘		杜　椿	×
8	13	媛女瘞銘		葉　媛	
9	13	陳君墓誌銘		陳　巖	×
10	13	故朝散大夫主管建寧府武夷山沖佑觀周先生墓誌銘		周淳中	
11	13	故太碩人臧氏墓誌銘		臧　氏	
12	13	葉君墓誌銘		葉　權	×
13	13	厲君墓誌銘		厲邦俊	
14	13	翰林醫痊王君墓誌銘		王克明	
15	13	郭府君墓誌銘		郭良臣	
16	13	郭處士墓誌銘		郭良顯	×
17	14	安人張氏墓誌銘		張　氏	
18	14	高夫人墓誌銘		翁　氏	
19	14	徐德操墓誌銘	●	徐　定	

20	14	忠翊郎致仕蔡君墓誌銘		蔡待時	
21	14	忠翊郎武學博士蔡君墓誌銘		蔡　鎬	
22	14	陳彦羣墓誌銘	●	陳季雅	
23	14	姜安禮墓誌銘	●	姜處恭	×
24	14	楊夫人墓表		楊　氏	
25	14	丁君墓誌銘		丁世雄	×
26	14	張令人墓誌銘		張幼昭	
27	14	參議朝奉大夫宋公墓誌銘		宋　傅	
28	14	呂君墓誌銘		呂師愈	
29	14	丁少詹墓誌銘	●	丁希亮	×
30	14	姚君兪墓誌銘	●	姚獻可	×
31	15	鄭仲酉墓誌銘	●	鄭　疆	
32	15	彭子復墓誌銘	●	彭仲剛	
33	15	宋武翼郎新製造御前軍器所監造官邵君墓誌銘		邵叔豹	
34	15	沈元誠墓誌銘	●	沈大經	
35	15	奉議郎鄭公墓誌銘		鄭耕老	
36	15	宋鄒卿墓誌銘	●	宋希孟	×
37	15	承事郎致仕黃君墓誌銘		黃正己	
38	15	朝奉大夫致仕黃公墓誌銘		黃仁靜	
39	15	司農卿湖廣總領詹公墓誌銘		詹體仁	
40	15	林伯和墓誌銘	●	林　勳	
41	15	翁誠之墓誌銘	●	翁　忱	
42	15	夫人薛氏墓誌銘		薛　氏	
43	15	致政朝請郎葉公壙誌		葉光祖	
44	15	高永州墓誌銘		高子莫	
45	16	朝散大夫主管沖佑觀鮑公墓誌銘		鮑　瀟	
46	16	莊夫人墓誌銘		莊　則	
47	16	寶謨閣待制中書舍人陳公墓誌銘		陳傅良	
48	16	著作正字二劉公墓誌銘		劉　夙	
				劉　朔	

49	16	朝請大夫司農少卿高公墓誌銘		高子溶	
50	16	夫人林氏墓誌銘		林　氏	／
51	16	孫永叔墓誌銘	●	孫椿年	×
52	16	林正仲墓誌銘	●	林頤叔	
53	16	夫人徐氏墓誌銘	／	徐　氏	／
54	16	提刑檢詳王公墓誌銘		王聞詩	
55	17	蔡知閤墓誌銘		蔡必勝	
56	17	徐道暉墓誌銘	●	徐　照	×
57	17	運使直閣郎中王公墓誌銘		王聞禮	
58	17	陳叔向墓誌銘	●	陳　葵	
59	17	黃子耕墓誌銘	●	黃　瞀	
60	17	台州教授高君墓誌銘		高　松	
61	17	戴夫人墓誌銘	／	戴　氏	／
62	17	劉子怡墓誌銘	●	劉士俔	×
63	17	劉夫人墓誌銘	／	劉善敬	／
64	17	沈仲一墓誌銘	●	沈體仁	×
65	17	胡崇禮墓誌銘	●	胡　撙	
66	18	校書郎王公夷仲墓誌銘	●	王　衍	
67	18	華文閣待制知廬州錢公墓誌銘		錢之望	
68	18	陳秀伯墓誌銘	●	陳堯英	×
69	18	著作佐郎錢君墓誌銘		錢易直	
70	18	劉建翁墓誌銘	●	劉起晦	
71	18	朝議大夫知處州蔣公墓誌銘		蔣行簡	
72	18	高令人墓誌銘	／	高　氏	／
73	18	葉君宗儒墓誌銘	●	葉士寧	×
74	18	李仲擧墓誌銘	●	李伯鈞	
75	18	朝請大夫主管沖佑觀煥章侍郎陳公墓誌銘		陳景思	
76	19	太府少卿福建運判直寶謨閣李公墓誌銘		李　浹	
77	19	中奉大夫太常少卿直祕閣致仕薛公墓誌銘		薛　紹	
78	19	國子監主簿周公墓誌銘		周　洎	

79	19	建康府教授惠君墓誌銘		惠　哲	
80	19	朝奉郎致仕兪公墓誌銘		兪　寬	
81	19	中奉大夫直龍圖閣司農卿林公墓誌銘		林　湜	
82	19	草廬先生墓誌銘		林　竦	×
83	19	袁聲史墓誌銘	●	袁直友	
84	19	京西運判方公神道碑		方崧卿	
85	20	文林郎前祕書省正字周君南仲墓誌銘	●	周　南	
86	20	寶謨閣直學士贈光祿大夫劉公墓誌銘		劉　穎	
87	20	故吏部侍郎劉公墓誌銘		劉彌正	
88	20	邵子文墓誌銘	●	邵持正	
89	20	虞夫人墓誌銘		虞　氏	
90	20	故禮部尙書龍圖閣學士黃公墓誌銘		黃　度	
91	20	太學博士王君墓誌銘		王　度	
92	21	朝請大夫直龍圖閣致仕沈公墓誌銘		沈有開	
93	21	宜人鄭氏墓誌銘		鄭　氏	
94	21	寶謨閣待制知隆興府徐公墓誌銘		徐　誼	
95	21	中奉大夫尙書工部侍郎曾公墓誌銘		曾　漸	
96	21	毛積夫墓誌銘	●	毛子中	×
97	21	徐文淵墓誌銘	●	徐　璣	
98	21	故通直郎淸流知縣何君墓誌銘		何　淪	
99	21	夫人陳氏墓誌銘		陳　氏	
100	21	劉靖君墓誌銘		劉　愚	
101	21	鄭景元墓誌銘	●	鄭伯英	
102	21	東塘處士墓誌銘		陳　瑾	×
103	21	中大夫直敷文閣兩浙運副趙公墓誌銘		趙善悉	
104	22	厲領衙墓誌銘		厲仲方	
105	22	趙孺人墓銘		樓　氏	
106	22	故知廣州敷文閣待制薛公墓誌銘		薛　弼	
107	22	故朝奉大夫知峽州宋公墓誌銘		宋紹恭	
108	22	故運副龍圖閣侍郎孟公墓誌銘		孟　猷	

109	22	太孺人唐氏墓誌銘		唐　氏	
110	22	故大宗丞兼權度支郎官高公墓誌銘		高子潤	
111	22	舒彥升墓誌銘	●	舒　杲	
112	22	鞏仲至墓誌銘	●	鞏　豐	
113	22	史進翁墓誌銘	●	史　漸	
114	22	林德秀墓誌銘	●	林　穎	×
115	23	宣教郎夏君墓誌銘		夏庭簡	
116	23	兵部尚書蔡公墓誌銘		蔡幼學	
117	23	福建運使直顯謨閣少卿趙公墓誌銘		趙彥倓	
118	23	故寶謨閣待制知平江府趙公墓銘		趙彥櫓	
119	23	孺人周氏墓誌銘		周　氏	
120	23	故大理正知袁州羅公墓誌銘		羅克開	
121	23	夫人錢氏墓誌銘		錢　氏	
122	23	朝議大夫祕書少監王公墓誌銘		王　柟	
123	23	郭伯山墓誌銘	●	郭　江	
124	23	竹洲戴君墓誌銘		戴龜朋	×
125	23	包顯叟墓記	●	包　昂	×
126	23	資政殿學士參政樞密楊公墓誌銘		楊　愿	
127	24	夫人王氏墓誌銘		王　氏	
128	24	滕季度墓誌銘	●	滕　宬	×
129	24	國子祭酒贈寶謨閣待制李公墓誌銘		李　祥	
130	24	周鎭伯墓誌銘	●	周鼎臣	
131	24	兵部尚書徽猷閣學士趙公墓誌銘		趙　師	
132	24	長潭王公墓誌銘		王思文	
133	24	故樞密參政汪公墓誌銘		汪　勃	
134	24	陳同甫王道甫墓誌銘	●	陳　亮	
			●	王自中	
135	24	故知樞密院事資政殿大學士施公墓誌銘		施師點	
136	25	宋廒父墓誌銘	●	宋　駒	
137	25	朝奉大夫知惠州姜公墓誌銘		姜處度	

138	25	陳處士姚夫人墓誌銘		陳　昺	×
				姚　氏	
139	25	孟達甫墓誌銘	●	孟　導	
140	25	黃觀復墓誌銘	●	黃　章	
141	25	修職郎監和劑局吳君墓誌銘		吳　葵	
142	25	戴佛墓誌銘		戴　丁	×
143	25	趙孺人墓誌銘	／	趙汝議	／
144	25	朝請大夫提擧江州太平興國宮陳公墓誌銘		陳　謙	
145	25	陳民表墓誌銘	●	陳　煒	×
146	25	宋葛君墓誌銘		葛自得	×
147	25	毛夫人墓表	／	詹　氏	／
148	25	母杜氏墓誌	／	杜　氏	／

官の欄の×印は、無官の者を示す。

なる。また葉適『水心文集』でも、百四十八首の墓誌から女性（単獨）の墓誌を除いた百二十三首の墓誌のうち、三五・八％にあたる四十四題（人數では四十五名）が字で記されている。(24)

題におけるこうした變化が、時期を追ってしだいに顯著になるとともに、墓誌の序において、相手を「友」と呼ぶことも目立つようになっている。〔**表二**〕は、王十朋・薛季宣・陳傅良・葉適の文集から、特定の個人に對して「友」と呼んでいる用例を拾い集めたものである。墓誌以外に詩、祭文や、各種の序記も含めて擧げてみることとしたい。

〔**表二**〕に擧げた人物の具體的な分析は第四節にておこなうこととして、ここでは、表を一覽した段階でうかがえる特徴についてのみ、簡單に整理しておきたい。まず、地域的分布としては、個人によって差が見られるものの、「友」と呼ぶ相手には、總じて地元溫州の人閒が多いことがわかる。また、溫州以外では、溫州の屬する兩浙東路の府州が目立ち、その中でも台州、とくに溫州に隣接した黃巖縣、仙居縣に「友」と認識する相手の多かったことがうかがえる。ただし、割合として多くはないものの、遠隔地の「友」も見られ、その中には科擧の同年合格者が少なからず含まれている。

つぎに「友」と呼んだ相手の地位については、何らかのかたちで官職に就いていた者が比較的多いが、官職・官位がまったく確認できな

〔表二〕「友」と認識した相手

〔A〕 王十朋（1112-1171；温州樂清縣；紹興27年（1157）狀元）自身の「友」

	人名	出身地		學 問	典 據	表 現
1	毛 宏	温州樂清縣	☆	補遺別附 1	『梅溪先生文集』前集卷 1「寄毛虞卿」	「弟兄竝皜秀如君少、朋友相知獨我深。」
					『梅溪先生文集』前集卷 2「戲酬毛虞卿見和」	「友生笑我爲狂客、…」
2	孫 皜	開封→會稽	×	——	『梅溪先生文集』前集卷 1「送子尙如浙西」	「有友如君」
3	余如晦	台州黃巖縣	×	補遺44 王十朋門人	『梅溪先生文集』前集卷 4「送黃巖三友」「又各贈一絕」	（左記の詩のタイトル）鄭遜志は下掲「觀水記」にも記載。
4	鄭遜志	〃	×	補遺44 王十朋門人		
5	施良臣	〃	×	補遺44 王十朋門人		
6	周仲翔	？	×	補遺44 王十朋門人	『梅溪先生文集』前集卷 5「周仲翔和詩贈以前韻」	「邇歲從師得吾友。」
7	周光宗	？	？	——	『梅溪先生文集』前集卷 7「和燕河南府秀才送周光宗」	「友人周光宗將參告太學、…」
8	劉 鎭	温州樂清縣	☆	補遺44 劉銓（仰文蔚學侶）傳	『梅溪先生文集』前集卷17「劉方叔待評集序」	「吾友劉方叔」
9	喩良能	婺州義烏縣	☆同	補遺56 喩氏（陳亮門人）先緒	『梅溪先生文集』後集卷 3「贈喩叔奇縣尉」	「同舍同年友、天資迥不羣。…（中略）…公餘時過我、無酒亦論文。」
10	查 籥	淮南東路泰州海陵縣	☆	——	『梅溪先生文集』後集卷12「送元章改漕成都」	「取友四十歲、普天半交遊。」
11	閻安中	成都府路邛州臨邛縣	☆同	——	『梅溪先生文集』後集卷13「三友堂」	「（閻・梁二同年過夔、把酒論文於小書室。既別、因自之曰三友。）丁丑同年友、三人忽此逢。」
12	梁 介	成都府路成都府雙流縣	☆同	——		
13	陳 讜	福建路興化軍仙遊縣	☆	——	『梅溪先生文集』後集卷20「贈陳教授正仲」	「益友平生所願親、南來深喜得斯人。…」
14	周汝能	紹興府嵊縣	☆同	補遺51 呂祖謙同調	『梅溪先生文集』後集卷26「天香亭記」	「明年春果擢巍第、與予爲同年友。」
15	李大鼎	？	？	補遺44 王十朋門人	『梅溪先生文集』前集卷17「觀水記」	「梅溪之南有巨溪焉、會一原之水而東歸者也、俗曰前

16	李　庚	?	?	補遺44 王十朋門人		溪。…（中略）…顧謂諸友曰：「孟子稱觀水有術、必觀其瀾。諸友今日之觀、其有得於水乎？」時同行十有二人、李大鼎 庚・謝鵬 舉朋・周千里 震・鄭遜志・童侃・鄔一唯・夏伯虎・陳廣、予與焉、不往者二人、謝與能・楊寓。庚午七月二十六日記。」
17	謝　鵬	?	×	補遺44 王十朋門人		
18	謝舉朋	?	×	——		
19	周千里	?	×	補遺44 王十朋門人		
20	周　震	?	×	補遺44 王十朋門人		
21	童　侃	?	×	補遺44 王十朋門人		
22	鄔一唯	?	×	補遺44 王十朋門人		
23	夏伯虎	溫州	×	補遺44 王十朋門人		
24	陳　廣	?	×	——		

〔B〕 薛季宣（1134-1173；溫州永嘉縣）自身の「友」

1	陳傅良	溫州永嘉縣	☆	學案53 鄭伯熊・薛季宣門人	『浪語集』卷23「與張左司書」	「友朋陳君擧」
					『浪語集』卷33「林南仲墓誌銘」	「走之友陳傅良君擧」
2	張　淳	溫州永嘉縣	特	學案52 薛季宣同調	『浪語集』卷35祭文「友張淳等」	（左記の祭文タイトル）
					※『止齋先生文集』卷47「張忠甫墓誌銘」	「忠甫與其友薛士龍・鄭景望齊名於時、而二人皆仕矣。」
					※『止齋先生文集』卷51「右奉議郎新權發遣常州借紫薛公行狀」	「其友人張淳」
					※呂祖謙『呂東萊文集』卷7「薛常州墓誌銘」	「其友張淳」
3	鄭伯熊	溫州永嘉縣	☆	學案32 吳松年講友	『浪語集』卷35祭文「友人張淳鄭伯熊」	（左記の祭文タイトル）
4	陳　亮	婺州永康縣	☆	學案56 鄭伯熊・芮煜門人	『浪語集』卷35祭文「永康友人陳亮諉陳傅良」	（左記の祭文タイトル）
5	劉　朔	福建路興化軍莆田縣	☆	學案47 林光朝門人	※『止齋先生文集』卷51「右奉議郎新權發遣常州借紫薛公行狀」	「其友人祕書省正字劉朔」

〔C〕 陳傅良（1137-1203；溫州瑞安縣；乾道８年（1172）進士）自身の「友」

1	丘　密	兩浙西路江陰軍	☆	學案79 張栻・呂祖謙同調	『止齋先生文集』卷４「送丘宗卿帥蜀」	「戶部侍郎丘公、…其友生永嘉 陳某、…」
2	葉　適	溫州永嘉縣	☆	學案55 鄭伯熊門人	『止齋先生文集』卷27「辭免實錄院同修撰第一狀」	「照對葉適與臣有鄉曲朋友之好、…」
3	樓　鑰	明州鄞縣	☆	學案79 朱熹私淑	『止齋先生文集』卷40「夏休井田譜序」	「吾友樓大防訪求得之、…。」
4	徐　泳	溫州平陽縣	★	——	『止齋先生文集』卷41「跋徐薦伯詩集」	「吾友徐薦伯登武擧第、…」
5	沈體仁	溫州瑞安縣	×	學案53 陳傅良門人	『止齋先生文集』卷42「跋張魏公南軒四益箴」	「吾友沈仲一」
6	朱同之	？	？	——	『止齋先生文集』卷44「朱子名說」	「吾友朱同之之子名植、字直卿。」
7	朱　黼	溫州平陽縣	×	學案53 陳傅良門人	『止齋先生文集』卷46「祭朱文昭母夫人」	「吾友文昭之母」
					『止齋先生文集』卷48「朱公向壙誌」	「吾友朱黼使來告葬曰…」
8	孫叔特	溫州永嘉縣？（妻を永嘉縣に葬る）	？	——	『止齋先生文集』卷47「趙夫人墓誌銘」	「余友孫叔特」
9	鄭伯熊	溫州永嘉縣	☆	學案32 吳松年講友	『止齋先生文集』卷47「胡少賓墓誌銘」	「又館於余師友鄭景望氏」
10	張　淳	溫州永嘉縣	特	學案52 薛季宣同調	『止齋先生文集』卷47「張忠甫墓誌銘」	「將葬、潘氏曰：「吾夫子之友惟陳君在、且余家壻、銘夫子無以易君者」。」
11	劉　春	溫州永嘉縣	☆同	補遺53 陳傅良講友	『止齋先生文集』卷48「陳子益母夫人墓誌銘」	「余方銘亡友劉端木未暇也、…」
12	徐　誼	溫州平陽縣	☆同	學案61 陳傅良・陸九淵同調	『止齋先生文集』卷48「承事郎徐公墓誌銘」	「子誼、吾友也。乾道八年吾友之同第進士者、獨余不幸蚤孤、不逮事父母、而諸君之親尙無恙、里中人往往以爲賀。」
13	陳　謙	溫州永嘉縣	☆同	學案53 陳傅良學侶	『止齋先生文集』卷49「陳習之壙誌」	「吾友陳謙 益之之從弟諱說、字習之、娶敷文閣直學士薛公良朋之姪孫女、知蕪湖縣珪之女。」
14	王自中	溫州平陽縣	☆	學案56 陳亮同調	『止齋先生文集』卷50「王道甫壙誌」	「嗚呼！此吾友王君道甫之墓。」

〔D〕 葉適（1150-1223；溫州永嘉縣；淳熙5年（1178）榜眼）自身の「友」

1	趙　燁	開封	☆	補遺58 陸九淵學侶	『水心文集』卷6「送趙景明知江陵縣」	「吾友趙景明」
2	陳季雅	溫州永嘉縣	☆ 同	——	『水心文集』卷6「送陳彥羣」	「餞我同年友」
3	孔元忠	平江府長洲縣	☆	學案55 葉適門人	『水心文集』卷7「孔復君架樓貯書疏池累石花藥環列」	「老夫一編未得妙、頗以書多爲世笑；舊友從余不復疑、樓藏萬卷猶嫌少。」
4	林　鼐	台州黃巖縣	×	補遺69 朱熹門人	『水心文集』卷7「林叔和見訪道舊感歎因以爲贈」	「與子異州壤、取友四十年。」
5	戴　溪	溫州永嘉縣	☆ 同	學案53 陳傅良同調	『水心文集』卷7「戴肖望挽詞二首」	「老失平生友」
6	郭晞宗	台州仙居縣	☆ 同	——	『水心文集』卷11「郭氏種德菴記」	「余同年友瓊州刺史郭宗之既沒十年、…」
7	胡　衛	紹興府餘姚縣	☆	學案77 胡撙（陸九淵門人）家學	『水心文集』卷11「宋吏部侍郎鄒公墓亭」	「余友胡衛道知常州、…」
8	趙汝讜	臨安府餘杭縣	☆	學案55 葉適門人	『水心文集』卷11「茶陵軍減苗置寨記」	「余友趙蹈中、轉漕湖南、察而憐之。」
9	衛　湜	平江府崑山縣	★	補遺79 衛涇（朱熹同調）家學	『水心文集』卷11「櫟齋藏書記」	「余友衛君　湜」
10	林　鼐	台州黃巖縣	☆	補遺69 朱熹門人	『水心文集』卷13「宋杜君墓誌銘」	「…而致其壻林鼐之述來請銘。…鼐、余友也、…」
11	蔡　鎬	台州黃巖縣	★	——	『水心文集』卷14「忠翊郎致仕蔡君墓誌銘」	「余與君之子鎬善、…（中略）…鎬又曰：「子一日嘗過我、父自屛窺之、曰『此可與友也、…』…」
					『水心文集』卷23「竹洲戴君墓誌銘」	「蔡氏姪滂、請余銘。滂父鎬、余友也、不得辭。」
					『水心文集』卷11「石菴藏書目序」	「石菴書若干卷、承奉郎蔡君　瑞藏之。…（中略）…君之從孫武學諭鎬、與余同寮、以請而序之。」
12	王自中	溫州平陽縣	☆ 同	學案56 陳亮同調	『水心文集』卷15「宋武翼郎新製造御前軍器所監造官邵君墓誌銘」	「余友王道父爲守、…」
13	劉彌正	福建路興化軍莆田縣	☆	學案47 劉夙（林光	『水心文集』卷16「著作正字二劉公墓誌銘」	「余童孺事二公、既與彌正爲友、而起晦實同年生。」

				朝門人）家學		
14	劉士偲	台州仙居縣	×	補遺55 葉適學侶	『水心文集』巻17「劉子怡墓誌銘」	「士偲、字子怡、余友也。」
15	鞏　豐	婺州武義縣	☆ 同	學案73 呂祖謙門人	『水心文集』巻22「鞏仲至墓誌銘」	「予友仲至、鞏氏、名豐。」
16	劉允濟	台州黃巖縣	☆ 同	——	『水心文集』巻23「夫人錢氏墓誌銘」	「同年劉使君、與余素舊、其守永嘉、常減騎數出、支坐熟語、良藥也。…（中略）…若使君信道執德、終始不變、則固余畏友矣。」
17	宋　駒	紹興府山陰縣	☆	學案55 葉適門人	『水心文集』巻25「宋廙父墓誌銘」	「蓋余友如君比不過數人爾、數年閒相繼死。悲夫！無以寄餘老矣。」
18	黃　度	紹興府新昌縣	☆	學案53 陳傅良學侶	『水心文集』巻25「黃觀復墓誌銘」	「承事郎提領所幹辦公事黃章字觀復、余友禮部尚書名度仲子、…」
19	姚獻可	婺州義烏縣	×	補遺55 葉適同調	『水心文集』巻27「與黃巖林元秀書」	「竇友姚君畬」

出身地…兩浙路の者は路名を省略。
記號…☆＝進士（☆同＝同年進士）、特＝特奏名、★＝その他によって官についた者、×＝無官）
學問…『宋元學案』または『宋元學案補遺』の巻數を示す。
典據…※の記號は、本人の文集以外の記事。

い者も含まれている。とくに、四十歳代半ばになって狀元合格したために官界入りが遲かった王十朋の場合、無官の者に對して「友」と呼んでいる割合が最も多くなっている。(23)

思想面との關わりを示すために、ひとまず便宜的にではあるが『宋元學案』および『宋元學案補遺』における各人の位置づけも、併せて示しておいた。これによると、直接の「同調」「學侶」をはじめとして、學問的にきわめて近い關係に入る者が多いが、學問の系統から言えば少し離れた者や、あるいは學案への記載のない者も含まれている。また自身の「門人」に對して「友」と稱する場合があることにも氣づかされる。

三　「友」の性格

さて、「朋友」の信は、周知のごとく、『論語』に繰り返し現れ、さらに『孟子』では「父子」「君臣」「夫婦」「長幼」と竝んで五倫に數えられていた。しかし、五倫のうち、他の四者が縱の關係であるの

に對して、この「朋友」のみは横の關係を示している。その朋友の概念が、もともと經書においていかなる特色をもっていたかについては、文化を媒介として道の完成へと助け合うのが朋友の本領であり、宿命的ではなく契約的な結合であることから選擇の自由があったこと、また文化を媒介とすることから、地域的な制限を受けることがないことなどが、藤川正數氏によって指摘されている。(26)

このうち、地域的な制限がないという點は、前節の表からもうかがえることであって、確かに「友」に地元の者が多いとしても、決して地元のみに限定されていないことは、宋代においても確認できることである。

そこで本節では、地域的な無限定性以外に、宋代においてはどのように意味合いで「友」という語が用いられていたのかを、王十朋・薛季宣・陳傅良・葉適の文集から確認しておきたい。

まず、友人による相互の助け合いについては、とくに墓葬のようにおろそかにしがたい場面に關連して、しばしば言及されている。たとえば、『水心文集』卷十三「墓林處士墓誌銘」では、處士のままに人生を終えた永嘉縣の何傅に對し、「死ぬるの日、其の友翁忱は既に之を襚斂し、又た嘗て往來せる者を率いて焉に瘞り、始めて西山崇明寺の旁に葬るを克くす」とあるように、「友」の翁忱（一一三七～一二〇五）が、交際のあった者にも呼びかけるなどして、入棺から埋葬まで盡力した事例が見られる。また、『同』卷十七「徐道暉墓誌銘」に、「而して君既に死し、同に唐詩を爲りし者は、徐璣、字は文淵、翁卷、字は靈舒、趙師秀、字は紫芝なり。紫芝は常なる朋友を集め、之を殯し且つ葬ること塔山・林額の兩村の閒に在り」とあり、永嘉四靈として知られる詩人グループの一人である徐照（？～一二一一）が亡くなった際に、四靈の他の三人が朋友として、やはり殯と埋葬をおこなったことが記されている。なかには、父を亡くした陳埴のために「友」の沈僩が墓の場所をトするような例も見られる。(27)

このような助力と竝んで墓誌にしばしば見られるのが、學問における友人關係である。たとえば、葉適は、自身の門人で台州黃巖縣の人である丁希亮（一一四六～一一九二）（字は少詹）について、「既にして少詹は盡く碩儒を師とし、盡く良

士を友とし、盡く名言を聞き、盡く別義を求む」（『水心文集』巻十四「丁少詹墓誌銘」）と記している。また葉適は、同じく門人で文才のあった邵持正（生沒年不明）についても、「多く譽れを朋友より得」（『水心文集』巻二十「邵子文墓誌銘」）などと記している。(28)

こうした傾向を反映して、（**表二**）A―十二に見られるように、「益友は平生親しむを願う所なり、南來して斯の人を得るを深く喜ぶ」（『梅溪先生文集』後集巻二十「贈陳教授正仲」）とあるように、『論語』(29)にさかのぼることのできる「益友」という概念を見出すことができるのは、互いを高め合う關係にふさわしいであろう。したがって、單に助け合うだけでなく、「朋友を是正す」るを事としていた温州永嘉縣の張淳（一一二一～一一八一）のような者もいた（『止齋先生文集』巻四十七「張忠甫墓誌銘」）。

そして互い高め合うことが視野に入っている以上、その相手は誰でもよいのではなく、選ぶという要素が入ってくることになる。墓誌などに「友を取ぶ」という表現がしばしば見られるのは、(30)まさに友人關係の選擇性を示すものといえよう。台州黄巖縣の戴龜朋（一一四六～一二〇七）について、「君は少くして苦學し、友を取れば必ず己より勝る」（『水心文集』巻二十三「竹洲戴君墓誌銘」）と記されているように、自分より優れた友を必ず選ぶ人物もいたほどであるが、逆に、「良友は得易からず」（『梅溪先生文集』前集巻九「和醉贈張祕書寄萬大年先之申之」）ということにもなるのである。

こうした意識的な選擇による關係は、互いの逆境においてこそ、その結びつきの強さがあらわれることも多かったようである。王十朋が同じ樂清縣の友人劉鎮（**表二**、A―七）について、「往事は眞に塞翁が馬に同じ」（『梅溪先生文集』前集巻二「懷劉方叔兼簡全之用前韻」）と詠む。何が過ぎ去った「往事」かと言えば、壬戌（一一四二）二月八日の跋によれば、庚申（一一四〇）の秋に王十朋が科擧受驗に失敗し、選擇を經義から詩賦へと變更しようとしたのに(31)對し、劉鎮が「須く失馬の事を知るべし、獲麟の書に廢むること莫かれ」と言ってなぐさめてくれたことを指しているとしている。

なかなか進士合格をしなかった王十朋は、(32)紹興十八年（一一四八）にも省試で落第している。同じく樂清縣出身で劉鎮

の従兄にあたり、十朋と長いつきあいのあった劉鉉（一一一〇～一一六五）の墓誌には、「某は少くして公と筆硯の交わりを爲し、辱じけなくも最も厚きを知る。公は既に笠仕せるに、某は猶お場屋に困しむ」という狀況にあったことを述べたうえで、「歳戊辰に某は下第し、舎選の就らざるを棄てんとし、公に武林に於いて遇えども、同に浙江を渡り、其の故を語る。公曰く、『子に進身の路有り、何ぞ乃ち自棄せんや！』と。力めて之を勉ます。越より學に還り、卒に舎法に由り進むは、公の力なり」（『梅溪先生文集』後集巻二十九「劉知縣墓誌銘」）として、太學上舎からの進士合格をあきらめて臨安から浙江（錢塘江）を渡って歸郷していた十朋を、越すなわち紹興府から再び臨安へと引き返させたことが記されている。

このように科擧不合格の者を精神的に支え續ける「友」の存在については、科擧合格の遲かった王十朋の文集なればこそ、科擧失敗に關する文章や詩が繰り返し登場しやすいわけであるが、當時の科擧下第士人の多さ[33]を考えると、こうしたタイプの友人關係の存在は、史料にあらわれた以上に實際には廣い範圍にあったものと思われる。

科擧による官員登用の本格化や、その他の經濟的な要因によって、宋代の社會的流動性は前代に比べて格段に增していたが、そうした中で、〔表二〕に示したような「吾友」「予友」「余友」などの直接的表現や、本節で見てきたような友人關係への言及の增加は、友情のもつ重要性の社會的高まりを反映したものとして捉えることができよう[34]。

四　地域社會における「友」

さて本節では、前節で述べたような感覺を以て認識されていた「友」關係が、實際にどのような相手との間でむすばれていたのかを、第二節の表に列擧した人物群からさぐっていきたい。

その前提として、「友」と呼びかけた側である王十朋・薛季宣・陳傅良・葉適ら自身について、それぞれが溫州の地域社會でどのような社會的地位にあったのかを簡單に整理しておくと、まず、彼らの中で、宋代溫州において最も有力な名族の出身であったのが薛季宣である。宋代に薛氏一族は、血緣が確認できる範圍だけでも十六名の進士を輩出しており、

薛季宣自身の父徽言（一〇九三～一一三九）も科擧官僚である。[35]

これに對し、他の三人は進士合格者の父や先祖を持たない。このうち、王十朋の王氏は五代末期に樂清縣に移住して農業をいとなんでいたが、十朋の祖父王格の時に家業が盛んになり、父王輔が儒を業とするようになった。[36]王十朋自身が「吾が家の西北に、原より田二頃有り、蓋し先業なり」として弟の王百朋がそこで農業をおこなっていたことを記している（『梅溪先生文集』前集卷十七「代笠亭記」）。樂清縣についてのデータではないが、參考までに隣の永嘉縣で葉適が民田買い上げのプランを示した際の、三十畝以上の土地所有者の構成比率[37]に照らしてみれば、二頃（二百畝）という土地所有は、相對的に廣い面積の土地所有だとは言えるものの、地域における最上層クラスの土地所有者にまでは入っていないくらいのものと考えてよいかもしれない。

陳傅良・葉適については詳細はわからないが、陳傅良も曾祖父・祖父・父ともに宮仕えをしておらず、父の代からようやく讀書人となったが、傅良自身も若い頃は貧困のために教書を業としていた。[38]また、葉適も、曾祖父は太學上舍生、祖父は瑞安縣で何らかの學生をしていたと見られ、父は童子相手の教師であったが、やはり官職を得ていなかったことでは共通している。[39]

したがって、溫州の地域社會において、薛季宣を除く王十朋・陳傅良・葉適の三人はいずれも、薛氏のような官員を代々輩出する家ではなく、またとびきりに廣大な面積の土地を所有しているわけではないようで、しかし遲くとも父親の世代までには多かれ少なかれ學問に緣のある家庭となっていたものと見られる。ただし、そうした彼らも、學問的な才能を發揮し、また官僚としての地位を得るにしたがって、地域の有力者とのつながりは密接となり、そのことは、たとえば陳傅良の娘が薛氏一族に嫁いだり、葉適が北宋の皇后を出した高氏一族から嫁を迎え、またその妻の妹が包履常（一一五四～一二一七）と結婚して生んだ娘がやはり薛氏一族に嫁ぐなど、單に薛季宣と學問的につながるだけでなく、溫州隨一の薛氏の名族婚姻ネットワークにも入り込んで行くことになるのである。[40]

つぎに、以上のような四人が實際に「友」と呼んだ相手の側が、どのような人物であったのかを、それぞれの地域社會における立場を可能な範圍で追跡しながら、以下、探っていきたい。

〔溫州〕

まず、四人にとっての地元である溫州內部の「友」には、第二節の〔**表二**〕からわかるように、「講友」「門人」などの直接的な關係をはじめとして、何らかの學問的な結びつきを伴っている場合が多い。また「同年」などによって更に緊密なつながりをもった場合も含まれている。

その地元の「友」たちが、溫州の地域社會においていかなる社會的立場の家庭の出身であったかを見ると、〔**表二**〕に擧げた人物のうちには、本人が官職に就いていたか否かに關わらず、既にさまざまな形で地元でのステータスを築いている場合が多く含まれている。たとえば、陳傅良の「友」である沈體仁（一一五〇～一二一一）は、自身は官職に就かなかったが、先祖には永嘉學派の先驅にあたる周行己らとともに北宋の太學で學んでいた「元豐太學九先生」の一人である沈躬行がおり、また、躬行の從子にあたる沈大廉が建炎二年（一一二八）に進士合格を果たして監察御史や提點福建路刑獄公事などを歷任するとともに[41]、その弟の沈大經も進士出身ではないものの漳浦縣主簿の官職を授けられていたことが確認できる[42]。「先に吳興より唐の亂を避けて溫州に遷り、瑞安の名家と爲る」（『水心文集』卷十七「沈仲一墓誌銘」）とあるように瑞安縣の「名家」としての地位を保っていた。そして沈體仁の時に至ると、景色のよい北湖に庭園・居室のある萱竹堂をつくり、「君の此の堂を爲るや、既に宗族を收合し、同に其の和平を養う」（『水心文集』卷九「沈氏萱竹堂記」）とも記されている。

また、先祖に官職に就いた人物がいない場合でも、そのことが卽ち裕福ではない一般的な家庭であったことを意味するわけではない。科擧に落第した王十朋を勵ました劉銓・劉鎭の從兄弟は、曾祖父・祖父が無官で、劉銓の父が贈官を受け

たのみではあるが、地元においては、「劉は邑に在りては著姓爲り、世々財に衍なり」（『梅溪先生文集』後集巻二十九「劉知縣墓誌銘」）とあるように、樂清縣の中では財産の豊かな著姓であったとされている。(43)

そして、こうした直系ないし傍系の先祖だけでなく、姻戚關係が宋代の地域社會で重要な意味をもっていたことは、とくにロバート・ハイムズ氏らによって強調がなされていることである。(44) 陳傅良の「友」孫叔德についてみると、本人については地方志を含む他の史料では何ら言及が見いだせないが、陳傅良が撰者となった孫叔特の妻の墓誌である「趙夫人墓誌銘」（『止齋先生文集』巻四十七）では、夫人の父趙耆孫は鄉貢進士（擧人）にとどまるものの、その趙氏一族は、「清獻公の族」、すなわち北宋官僚趙抃（一〇〇八～一〇八四）の一族であること、またその子趙屼が熙寧年間に溫州に通判として赴任して來たこと、以後も今に至るまで進士合格者が乏しくないこと、孫叔特の息子たちも陳傅良と交遊關係にあることなどが記されている。また、葉適の「友」で同年進士の陳季雅（一一四七～一一九一）の場合も、「陳彦羣墓誌銘」（『水心文集』巻十四）に、曾祖父・祖父・父に官職の記載はないものの、父陳裕の夫人劉氏の父劉仲光について、「長者名士」であると記しており、また地方志によっても乾道二年（一一六六）の進士であることが確認できる。(45)

またこれら以外にも、陳傅良の「友」陳謙の父である陳敦化は、「家に百金を累ね、益々能く增修す」として、一族や鄉里の人々の救濟、橋梁・道路の整備や凶作の年の穀物の平價賣り出しなどをおこなったとされている（『浪語集』巻三十四・行狀「陳益之父」）。「百金」、つまり多額の金を有し、慈善活動をおこない得る餘裕をもっていた家ということになる。また、同じく陳傅良が「友」と呼んだ徐誼（一一四四～一二〇八）の父徐迪哲について陳傅良は、「蓋し州閭の長老にして嘗て公を識る者は、誼に見ゆれば卽ち以て公に似たりと爲して喜び、天下の士にして誼を識る者は、或いは公に見えて又た誼に似たりと喜ぶ」（『止齋先生文集』巻四十八「承事郎徐公墓誌銘」）と記し、「州閭の長老」の間で徐迪哲が知名度のあったことをうかがわせる。

しかしその一方で、こうした家庭的な背景を確認できない人物もいる。たとえば、陳傅良の「友」であり門人でもあっ

た朱黼（字は文昭）は、「文昭は蓬累して南蕩の上を耕し、山水は疊み重なり、聲迹は落落として、人は其の能く陳公の業を傳うるを知らざるなり」とあるように、南雁蕩山で自ら耕すという生活の中で、陳傅良の死から久しくして『紀年備遺』一百卷を撰し、葉適がその序を記しているが、この朱黼の家庭について知ることができるのは、朱黼の祖母章氏が太學生章陞の娘であったことくらいである。またそれ以外に、〔表二〕に擧げた人物でも、家庭狀況を史料的に何ら確認のできない人物もいる。

こうして見てくると、直系の先祖に官職保有者がない者の場合でも、地域社會において大なり小なり名望があり、また金錢的にもかなり豊かな層が比較的多い一方で、家庭の狀況が決して恵まれていない人物も含まれており、ここに登場する「友」たちの階層が必ずしも地域社會における上層に限られてはいなかったことがうかがえるように思う。

〔台州〕

つぎに、葉適が早くから關係のあった台州における「友」との關係を見てみたい。

まず、葉適が二十歲に達しない未冠の頃からの「友」が、台州の林鼐（一一四四～一一九二）・林鼐（一一四六～一二一六）の兄弟であった。決して裕福ではなかった葉適は、十六歲であった乾道元年（一一六五）から十九歲の乾道四年（一一六八）の間、樂清縣白石にて童子を教えて生計をたてながら勉學に勵んでいた。州境はこえるが樂清縣の隣の台州黃巖縣の林兄弟と交遊關係をもったのは既にこの頃からとされ、その後も淳熙八年（一一八一）に林鼐に送った手紙が『水心文集』に殘されていたり（卷二十七「與黃巖林元秀書」）、嘉定元年（一二〇八）に官を退いて永嘉縣水心村に戻ってきた葉適を林鼐が訪問し、嘉定四年には林鼐の仲介で黃巖縣令楊圭のために葉適が「利涉橋記」（『水心文集』卷十）をつくるなど、(46)確認できるだけでも長期の交際を見出すことができ、また兄弟の死に際しては、それぞれに對して祭文・墓誌を撰している。(47)兄林鼐は科擧官僚となり、弟林鼐は一生官途に緣がなかったが、林鼐は、北宋期に黃巖縣最初の進士を出した名門で南宋末

期に杜範・杜滸らの官僚を輩出することになる杜氏[48]から妻を迎えており、この杜氏一族の杜椿（一一一五～一一八八）に對しては葉適も墓誌を撰している（『水心文集』巻十三）。

また、同じく葉適が「友」と呼んだ相手である蔡鎬（一一四三～一一九一）も、武擧により登第した本人とは異なり、曾祖父・祖父・父ともに實際の官職には就いていなかったようだが、「仕うるを得ずと雖も、家は世々豪族なり」（『水心文集』巻十四「忠翊郎致仕蔡君墓誌銘」）とされている。また、父蔡待時の娘（蔡鎬の姉または妹にあたる）が嫁いだ戴龜朋の戴氏も、宣和六年（一一二四）進士の戴舜欽[49]を祖父にもち、「族數十を聚め、富み樂しむこと累世なり」（『水心文集』巻二十三「竹洲戴君墓誌銘」）とされており、いずれも黄巖縣で有力な一族であったことがうかがえる。

ここに登場した林鼐および蔡鎬は、いずれも淳熙九年（一一八二）に朱熹（一一三〇～一二〇〇）が提擧兩浙東路常平茶鹽公事として台州巡視に來た際に、才能を買われて開門整備の指揮監督をまかせられている。思想史的には朱熹との關係が強調され、林鼐・林鼒ともに、『宋元學案』で言えば朱熹の門人とされているが、交遊關係から見れば、その後も引き續き葉適との關係を保っていたことになる。また蔡鎬と葉適とは、蔡鎬の父の墓誌に「余と君の子鎬とは善し」（前掲「忠翊郎致仕蔡君墓誌銘」）として仲の良さが記されているが、その蔡氏の家は藏書によって知られる家でもあり、その藏書目の序を葉適自身が書いている（『水心文集』巻十二「石菴藏書目序」）[50]。

以上のように、台州の黄巖縣は溫州から近く、葉適も科擧合格前の早くから「友」たちと繼續的な關係を形成していたが、その「友」たちは、黄巖縣の地域社會において一定のステータスを持ち、有力者相互の婚姻ネットワークを形成している人々であった。

〔婺州〕

台州の場合と同様に、葉適が進士合格する前から深い學問的交流のあったのが、婺州の人士であった。先に觸れた樂清

縣での講習生活を終えた葉適は、以後、乾道四年（一一六八）から同七年（一一七一）の期間、および乾道八年（一一七二）、淳熙二年（一一七五）の計三度にわたって、婺州での遊學をおこなう。この間、義烏縣の姚獻可（一一四〇～一一九六）、東陽縣の郭良臣・郭良顯、永康縣の陳亮（一一四三～一一九四）の家に遊び、また武義縣明招山に呂祖謙（一一三七～一一八一）を訪れるなどしている。葉適自身が「友」と呼ぶ史料が殘っているのは、これらのうちの姚獻可であり、同じく婺州出身者で後に葉適の「友」となったのが武義縣の鞏豐（一一四八～一二一七）である。

姚獻可は、葉適が台州の林鼒の紹介によって訪れたのだが[51]、曾祖父・祖父・父が官職に就いた形跡はなく、彼自身も同様に一生を終えており、また科擧に受からない姚獻可を周圍の人々が貧しくて堪えられないのではと心配していたことが彼の墓誌に記されているほどで、經濟狀態もよくはなかったようである[52]。これに對して、鞏豐は三歲にして父を失ったが、祖父鞏庭芝は紹興八年（一一三八）進士、おじ鞏湘は紹興十二年（一一四二）進士とされ、若くして呂祖謙のもとで學んでいた[53]。

この婺州で更に注目しておきたいのは、陳亮との關係である。永嘉學派と永康の陳亮との密接な學問的關係については、先學によって既に繰り返し述べられているところであるが、實際に陳亮も溫州を三度訪れている[54]。そうした關係を反映して、薛季宣が「友人陳亮」と呼んだ（表二 B―二）だけでなく、逆に陳亮からも永嘉學派の人物に對して「友」と呼んだ史料を多く確認することができる。すなわち、陳傅良に對して「吾が友陳傅良君擧」（『龍川集』卷十四「伊洛禮書補亡」序）、葉適に對して「吾が友瑞安葉適正則」（『同』卷二十八「錢叔因墓誌銘」）と呼び、また彼らの師にあたる鄭伯熊（？～一一八一）に對しても「某の師友永嘉鄭公」（『同』卷十五「送叔祖主筠高安簿序」）、「吾が亡友」（『同』卷二十二「祭鄭景望龍圖文」）と呼ぶなどしている。薛季宣・陳傅良が歷代經籍制度の考訂による復元にとどまっていたのに對して、葉適が晩年の『習學記言序目』において理學への批判を強めたことの背景には[55]、こうした陳亮との度重なる機會の討論があり、したがって、このような「友」關係は、單に思想面での一定の類似性による結果として成立するだけでなく、さらに積極的に

は、相互の思想をしだいに變化させる效果をも持ち得たと言えるであろう。

淳熙二年、葉適が婺州に三度目の遊學をした際、葉適が呂祖謙を訪ねたのは陳亮の紹介によるものであった。葉適がそのすぐ後の淳熙四年（一一七七）に兩浙東路轉運司の漕試を受けることができたのは、呂祖謙と仲のよかった周必大（一一二六～一二〇四）の門客として參加できたためであり、また、翌淳熙五年（一一七八）に葉適が榜眼で進士合格した時に、呂祖謙は殿試考官となっていた。このように葉適の進士合格に深い緣のあった呂祖謙は、周知のごとく、呂蒙正、呂夷簡、呂公弼・呂公著ら北宋の有力政治家たちの後裔にあたる金華の著姓望族の一員である。[56] しかし他方、同じ婺州で呂祖謙と關係の深かった陳亮は、官員の家柄ではなく、田二百畝と園四十畝を「先祖先人の舊業」とする「中產」[57]であり、しかも父の入獄などの頃には土地無しにさえ轉落している有樣であった。このように決して富豪とは言えない陳亮だが、廣大な田地を有して商業も營む義烏縣の何氏から妻を迎えており、死の直前、五十一歲で狀元合格するまでの長い時期を擧人として過ごしていた陳亮は、姻戚關係によって強力な支えを得ていた。[58] その點では、裕福な家庭の出身ではなかったものの北宋外戚の子孫にあたる高氏から妻を迎えた葉適の場合と、相い通じるところがあろう。陳亮が、妻の弟である何大猷（一一六二～一一九〇）の祭文に、「嗚呼、恩は姻戚より隆（たか）きこと莫く、義は朋友より重きこと莫し」（『龍川集』卷二十四「祭妻弟何少嘉文」）と述べているのは、學問的才能を有した人物が、姻戚關係と友人關係をともに必要としながら生きている狀況をまさに象徵した言葉であるといえる。

〔平江府〕

台州・婺州は溫州と同じ兩浙東路に屬するが、浙東ではない府州でありながら葉適の「友」が二人含まれているのが平江府（蘇州）である。これは、進士合格後、母の服喪が滿ちてまもなくして、淳熙八年（一一八一）に三十二歲の葉適が浙西提刑司幹辦公事として實際に赴任したことと關係している。以後、淳熙十二年（一一八五）冬までの間、葉適はこの任

にあり、同時に平江府にて講學活動をおこない、孟猷（一一五六～一二一六）・孟導（一一六〇～一二二〇）兄弟、滕宬（一一五四～一二一八）、周南（一一五九～一二一三）、孔元忠（一一五七～一二二四）、王大受など、多くの門人を得ている。これらの人物たちと關わりの深かった衞湜を葉適は「余の友」と呼び、また葉適は後に孔元忠のことを詠んだ詩の中で「舊友」としている。

このうち衞湜は、政和八年（一一一八）の進士である祖父衞闓（一〇九〇～一一五一）、伯父衞時敏（一一三三～一一八〇）、父衞季敏（一一三七～一二〇〇）、淳熙十一年（一一八四）に狀元となる兄衞涇、慶元五年（一一九九）進士となる弟衞沂、嘉定元年（一二〇八）進士となる弟衞洙・衞洽など、官僚を續々と輩出する家の人物であった。衞湜も科擧には合格しなかったものの、『禮記集說』百六十卷を撰している。このように衞氏は、南宋期平江府における有數の名族であり、また、葉適の講學に從っていた人士たちとも、たとえば周南の娘が衞涇の息子である衞樸に嫁し、婚姻關係による結びつきを形成していた。

その周南と仲がよく、葉適の高弟であった孔元忠は、南宋初に張俊にしたがって功をあげて官に補せられた孔道の子であり、科擧には合格したことは確認できないが官職につき、『論語鈔』十卷などを著している。

葉適の「友」として確認できる衞湜と孔元忠の二人に共通しているのは、ともに藏書家であった點である。葉適は衞湜の藏書について「酷だ書を嗜み、山聚林列し、櫟齋を起てて以て之を藏め、弟兄孳子と與に中に於いて習業す」（『水心文集』卷十一「櫟齋藏書記」）と述べている。[59] また葉適は孔元忠についても、「老夫は一編も妙を得ざるも、頗る書の多きを以て世の笑と爲る。舊友は余に從いて復た疑わず、樓藏萬卷なれども猶お少なきを嫌う」（『水心文集』卷七「孔復君架樓貯書疏池累石花藥環列」）と記している。[60]

比較的長生きの葉適は、平江府赴任時期の自分より年下の門人たちに對しても、數多く祭文や墓誌を撰している。それによれば、結局官に就かなかった滕宬は、曾祖父・祖父・父がいずれも官職に就いており、[61] 逆に紹熙元年進士となった周

南は、父が承奉郎をおそらくは贈られただけで曾祖父・祖父に官歴が確認できないなど、[62]出身の家庭環境や本人の履歴はさまざまだが、いずれにせよ葉適は晩年まで彼らとの連絡を保っていたわけであり、周南に對しては文集の後序まで撰している。[63]ただ、同じ葉適の門人でも、孟猷・孟導兄弟は、北宋哲宗の孟皇后の兄孟忠厚の孫にあたっており、衞氏一族の場合などと併せて考えると、葉適が平江府で親しくしていた學問仲間は、平江府で名望ある一族をめぐる人的ネットワークと重なる存在であったと言えるであろう。

以上、比較的多くの「友」が見られる地域について、それぞれの地域社會での位置づけをできるだけ踏まえつつ、「友」がどのような人物たちであるかを見てきた。これらの地域以外の「友」の事例もあわせて、王十朋・薛季宣・陳傅良・葉適らと「友」との關係の性格を、三點に分けて整理しておきたい。

（一）「友」の相識性

本稿では實際に「友」という語が用いられている事例を取り上げてきた。斷片的に登場する人物の場合をのぞくと、多くの場合において、長期にわたっての關係、地元あるいは任地にて密接な交流、あるいは同年進士・同郷などでなんらかの共通項の存在などを、確認することができる。つまり、「友」という用語は、表面的・儀禮的に用いられることが決して多くはないか、あるいは、假に表面的に用いられたとしてもそれが少なくとも不自然には感じられない關係の存在を前提に用いられていた、と判斷できるように思う。

したがって、既に擧げた諸例以外では、他路・他府州の出身者で溫州に赴任してきた者の場合も見られる。たとえば、福建路の出身で、陳傅良が薛季宣の「友人」であると記した劉朔（一一二七～一一七〇）、および葉適が「友」とした劉彌正（一一五七～一二一三）の場合は、劉朔とその兄劉夙（一一二四～一一七二）が、弟が溫州戶曹（司戶參軍）として、兄が溫州州學教授、知溫州として、相次いで溫州に赴任しており、[64]また、葉適は、「余、童孺にして二公に事え、既に彌正と友

と爲り、而して起晦は實に同年生なり」（『水心文集』巻十六「著作正字二劉公墓誌銘」）と述べ、子供の時に既に劉夙・劉朔の二公につかえ、劉夙の子である劉彌正とは當時から「友」となり、劉朔の子である劉起晦は「同年生」、すなわち淳熙五年の同年進士となったことを記している。[65] それ以外にも、陳傅良が「吾が友」と稱した明州出身の樓鑰（一一三七～一二一三）も、温州州學教授、および知温州として赴任してきたことがあり、その際には陳傅良ら温州の「賢士」と交流をもち、[66] 永嘉學派に對する理解も深かった。[67] 温州赴任の例ではないが、葉適が「余の友」と呼んだ胡衛は、明州通判をしていた嘉定六年（一二一三）に父胡撙の墓誌執筆を依頼するために温州に來ているようなケースも見られる。[68]

また逆に、温州から離れた任地で舊交を暖めるケースも見られた。紹興二十七年（一一五七）に狀元となった王十朋は、たまたま乾道二年（一一六六）に知夔州として任地にあった時、ともに四川出身の同年友である榜眼の閻安中、探花の梁介の二人と再會を果たしている。「同年」であることは、**〔表二〕**からもわかるように、「友」の關係を成立させやすい要素をもっており六十九、王十朋も「小書室に於いて酒を把り文を論ず」（『梅溪先生文集』後集巻十三「三友堂」）として「同年友」との議論を樂しんだことを詠んでいる。

このように「友」關係においては互いに相識っていることが前提となるため、遠隔地の「友」が必ずしも多いわけではない。「友」は「地域的な制限を受けることがない」が、同時に、當時の交通事情等を勘案すれば、會う頻度の高さから、「友」關係が同じ州や同じ路の中で形成されやすいことも事實と言えよう。

（二）「友」關係の效用

「友」の關係において、前節で述べたように互いに高め合うことが一つの重要な要素となっていたことは、その相互關係についての記述の中でしばしば議論についての言及があることも一つの表れと言える。既に擧げた例以外でも、たとえば、陳傅良とその同年友であった劉春（一一三六～一一八〇）（字は端木）との閒柄について、陳傅良自身は「余と端木とは同に太學に入り、同に乾道八年進士と爲り、議論の往復は最も密にして、至りて相好なり」（『止齋先生文集』巻四十八「劉

端木墓誌銘」）と記している。また、王十朋については同年友たちと酒を飲んで文を論じた例を先に掲げたが、王十朋は婺州義烏縣出身で「同舍同年友」である喩良能（字は叔奇）との關係について、「叔奇は會稽に攝職し、公事の暇に、必ず僕を民事堂に訪ね、終夕、文を論ず」と前置きしたうえで、「公は餘時に我を過ぎれば、酒無くとも亦た文を論ず」（『梅溪先生文集』後集卷三「贈喩叔奇縣尉」）と、紹興府簽判として赴任していた時のことを詠んでいる。

先に陳亮と永嘉學派との關係について述べたように、相互の議論による意見交換は思想形成にまで影響をもったものと見なすことができるが、こうした「友」による議論は、著名な思想家が著名な思想家の間でというだけでなく、『宋元學案』には登場せずに『宋元學案補遺』になってようやく陳傅良の「講友」として名を連ねられることになる劉春のような人物との間でも、さかんに行われていたことになる。

以上は學問面でのいわば建設的な效用であるが、他方で、こうした「友」關係が官界に入り、また昇進をしていくうえで機能を果たしていたことも附け加えて述べておきたい。葉適が婺州にて陳亮を通して呂祖謙人脈へのつながりをつけたことが、彼の進士合格に有利な條件を提供したことについては既に觸れたが、逆に葉適も、官界での地位の上昇にともなって、淳熙十五年（一一八八）には右丞相周必大に對し、陳傅良・劉淸之・勾昌泰・祝環・石斗文・陸九淵・沈煥・王謙・豐誼・章穎・陳損之・鄭伯英・黃艾・王叔簡・馬大同・呂祖儉・石宗昭・范仲黼・徐誼・楊簡・潘景憲・徐元德・戴溪・蔡戡・岳甫・王枏・游九言・吳鎰・項安世・劉爚・舒璘・林鼐・袁謇・廖德明の計三十四名を推薦している。[70] ここでは、當時の著名な思想家たちとともに、〔表二〕に陳傅良や葉適の「友」として擧げた徐誼・戴溪・林鼐らが推薦され、また、呂祖謙の弟呂祖儉、鄭伯熊の弟鄭伯英なども含まれている。また、嘉泰三年（一二〇三）には、樓鑰・丘密・黃度を推薦しているが、[71] この三人はやはりいずれも〔表二〕に陳傅良または葉適の「友」として登場する人物ばかりである。葉適は他に、陳亮の子まで推薦をおこなっており、「友」による助け合いは、人事面にも及んでいたことがうかがえる。

（三）地域社會における階層性

最後に、地域社會における階層性の視點から、「友」のあり方を整理しておきたい。本節の最初にも述べたように、溫州隨一の名族薛氏の出身である薛季宣をのぞくと、王十朋・陳傅良・葉適らは、裕福で何の不自由もなく學問に打ち込める環境にいたわけでは決してなかった。そして、彼らの「友」には曾祖父・祖父・父の三代にわたって有官者が確認できない者や、結局は科擧合格できないままに終わった者が、少なからず含まれていた。(72) その意味で、史料からうかがえる「友」たちが、決して官僚や廣大な土地の所有者ばかりでなかったことは、流動性の高まった宋代の地域社會の新たな姿を反映していると言ってよいであろう。

しかし同時に、こうした「友」の中に、それぞれの地域社會において名望を有したとされる一族の出身者が數多くおり、また實際に代々官員を輩出し續けている一族も確實に含まれていたことも、あらためて強調しておく必要があろう。しかも、こうした「友」を通しての關係だけでなく、葉適や陳亮のように才能ある若者が外戚の流れを汲む名族や廣大な土地を有する一族から妻を迎えていたことは、地域社會や官界でのし上がっていくために、單に個人的な實力だけではないものが必要とされていたことを示しているであろう。

また、このことと關連することとして指摘しておきたいのは、「友」や、あるいはその關係する人物に、藏書家がしばしば登場することである。平江府の衞湜・孔元忠、台州黃巖縣の蔡瑞、また言及はしなかったが明州鄞縣の樓鑰も潘美月氏が藏書家に數えている。(73) それ以外で、「友」本人が藏書家である事例ではないが、葉適が「余の友」と呼んだ紹興府新昌縣の黃度（一一三八～一二一三）の家は、その父黃仁靜の時に「田二十頃を有す」に至った「越の聞家」であるとされ（『水心文集』卷十五「朝奉大夫致仕黃公墓誌銘」）、黃度は、陳傅良とも「論議は頗る相い出入す」（『水心文集』卷十二「黃文叔周禮序」）とあるように相互に議論する仲の學侶であった。陳傅良自身によれば、「越の新昌の姓は、石・呂・黃を大と爲す。余、嘗て黃度文叔の家に館し、石・呂二氏と遊ぶを得、其の子弟は多く予の學に從う」（『止齋先生文集』卷四十九「修

職郎呂公墓誌銘」）とあるように、陳傅良は黄度の家に泊まり、石氏・呂氏の人々とも交流をもっていた。この石氏とは、葉適が推薦した三十四名の中に名が擧がっている石宗昭や、その従兄石斗文（一一二九～一一八九）の一族であり、石斗文の祭文に「書册は未だ嘗て親しまざるはなく、而して書味は厭飫にして優柔なり」（陳亮『龍川集』巻二十四「祭石天民知軍文」）として、讀まない書籍はなく、しかもそれをゆったりと味わっていたことが記されているように、藏書で知られた家であった。(74) 陳傅良と同じ瑞安縣の出身で「余に従いて遊ぶこと最も久し」と言われた林居實（？～一一七五）（字は安之）も、陳傅良が「會稽の石氏藏書房に寓するに、至る者蓋し百に一なり、而るに安之は又た先んず」と記しており、石氏藏書房にいた陳傅良を、門人の中で先んじて追いかけてきたことを記している（『止齋先生文集』巻四十七「林安之壙志」）。陳傅良は「余は新昌に往來すること三年」（前掲「修職郎呂公墓誌銘」）と述べており、學問仲間の關係を通してこうした藏書家のもとに出入りしていたわけである。藏書については、最近、井上進氏が、相當規模の藏書をもちうるのは、上層士大夫に限られていたことを指摘しているが、(75) 本稿のように具體的な地域社會に即して分析してみても、ここで登場する藏書家は、多くがやはり官僚の家や代々の名家であることが確認できるのである。

五　結　語

以上、本稿では、宋代以降の地域社會において頻繁に用いられるようになっていた「友」という用語について、温州出身で多くの墓誌等を残している王十朋・薛季宣・陳傅良・葉適をめぐる關係を事例として、地域内・地域間の人的交流や地域社會の階層性などに着目しながら、ケーススタディをおこなってきた。むろん實際の友人關係は、直接的に「友」と呼びかけた範圍をこえることも多々あろうが、本稿では確實に本人が「友」と認識している證據のある者を通して、その分析をおこなってきた。

そしてこうした關係は、決して温州に限られるわけではなく、北宋から南宋にかけて、墓誌等において「友」と呼びか

ける例は、各地においてしだいに増加しているように思われる。たとえば、一例をあげると、四川出身で少し世代的にも下るが、葉適に敬意を以て接していたとされる魏了翁（一一七八～一二三七）[76]の文集である『鶴山集』にも非常に多くの墓誌が残されており、そこでも頻繁に「吾が友」「同年友」などの言葉が用いられている。本稿における宋代の「友」についての検討は、まだまだ初探の段階にとどまるものであるが、今後は、他の地域の場合との比較や、朱熹など同時代の他の思想家の場合との比較も含めて、さらにいろいろな角度からの分析が待たれるところである。

ただし、本稿を終えるにあたって、温州の地域性との関係について少しだけ觸れておきたい。本稿で取り上げた温州の人物たちは、温州をどのような場所として認識していたのかという點についてである。葉適は「隆興・乾道中、浙東の儒學は特に盛んなり」（『水心文集』巻二十五「朝請大夫提擧江州太平興國宮陳公墓誌銘」）と述べてはいるが、その地元意識の表れとしての使用頻度からすると、「浙東」の使用よりも壓倒的に多く見られるのは、温州を指す「永嘉」である。[77]

たとえば、王十朋は、「永嘉は元祐より以來、士風浸く盛んなり、（中略）建炎・紹興の間に至り、異才輩出し、往々にして東南に甲たり」（『同』後集巻二十九「何提刑墓誌銘」）、あるいは、「永嘉は多士と號し、東南に甲たり」（『梅溪先生文集』後集巻二十九「劉知縣墓誌銘」）と述べ、優秀な士を輩出する場所としての「永嘉」をイメージしている。[78]本稿の冒頭に紹介した新出土の「宋故國子小學錄張公墓誌銘」において、「永嘉は浙東に於いて多士と號す」と記されており、この墓誌の撰された南宋初期の認識を反映していたものと言えよう。その後、瑞安縣出身の陳傅良が樂清縣出身の王十朋の死を悼んでつくった祭文の冒頭に、「吾が鄉は昔より、諸儒に作有り。剛毅にして敦龐なり、是を以て俗と爲す」（『止齋先生文集』巻四十五「祭王詹事」）と記している。そして、葉適が科擧の地方試驗合格者の壯行會である鹿鳴宴について詠んだ詩の中で「永嘉は千載に近けれども、文物は斯に於いて盛んなり」（『水心文集』巻七「鹿鳴宴詩」）とうたい、永嘉の長い歷史の中で文化的に頂點に達した時期として今を位置づけているのは、まさに北宋から南宋にかけて「永嘉」にて學問がしだいにさかんとなってきた流れの歸結の位置に自分たちを位置づけているのであり、そうした地域アイデンティティの意識

のもとで、葉適は自分たちの學問を「永嘉之學」[79]と稱したのである。

陳傅良はこのような地元温州について、「吾が州の俗は師友を尊重す」（『止齋先生文集』巻四十九「林懿仲墓誌銘」）、あるいは、「吾が鄉の風俗は、客を敬いて師友に敦し」（『同』巻四十「分韻送王德修詩序」）と述べている。「多士」の人材による獨自色の濃い學問が展開された温州は、同時に「師」や「友」を重んじる地域としても認識されていたのである。

こうした温州に對する認識は地元出身者だけではなく、たとえば先に少し觸れた魏了翁も、「人物は乾淳に盛んなり、東嘉は最も人を得」（『鶴山集』巻九十六「淮西總領蔡少卿範生日」）[80]と述べており、他の地域の士大夫からも同樣に捉えられる場合があったことがうかがえる。

したがって、本稿で分析を試みた「友」の關係は南宋期温州にだけ見られるものではないが、しかし少なくとも、こうした「友」の語の使用がしだいに頻度を增している時代の、しかもそれが重んじて認識されている一つの典型的な地域の事例としてとらえることができるものと思う[81]。

註

（1）王同軍「温州郭溪梅園發現南宋張煇家族墓」（『東方博物』第二輯、一九九八）。本論文の存在については、元・佛教大學大學院生の藤田愼一氏よりご教示を得た。また、その後、温州市の龍灣博物館の吳明哲館長のご厚意で、この墓誌の現物を確認させていただいた。ここに記して、兩氏に謝意を表したい。

（2）劉嗣明は、開封府祥符縣の人である（『宋史』巻三百五十六・劉嗣明傳）。

（3）增淵龍夫著『中國古代の社會と國家』（弘文堂、一九六〇年、新版は岩波書店、一九九六年）。

（4）內藤湖南著『支那論』（文會堂書店、一九一一年、後に『內藤湖南全集』第五巻、筑摩書房、一九七二年、所收）。

（5）たとえば「形をもたないソシアビリテ」という表現も見られる（二宮宏之編『結びあうかたち——ソシアビリテ論の射程』、山川出版社、一九九五年）。

（6）川勝義雄著『六朝貴族制社會の研究』（岩波書店、一九八二年）。

（7）夫馬進著『中國善會善堂史研究』（同朋舍、一九九七年）。

（8）ジョセフ・P・マクデモット（中島樂章譯）「明末における友情觀と帝權批判」（『史滴』第十八號、一九九六年）。

（9）小野和子著『明季黨社考――東林黨と復社――』（同朋舍、一九九六年）。

（10）小川晴久「朋友論ノート」（東京大學教養學部『人文科學科紀要』第七四輯、一九八二年）。

（11）朱瑞熙他著『遼宋西夏金社會生活史』（中國社會科學出版社、一九九八年）第十三章「社會交誼及其禮節」に言及されている。また、拙稿「宋代の地域社會と知――學際的視點からみた課題――」（伊原弘・小島毅編『知識人の諸相――中國宋代を基點として――』、勉誠出版、二〇〇一年）も參照されたい。

（12）拙稿「南宋期溫州の名族と科擧」（『廣島大學東洋史研究室報告』第一七號、一九九五年）、同「南宋期溫州の地方行政をめぐる人的結合――永嘉學派との關連を中心に――」（『史學研究』第二二二號、一九九六年）、同「南宋期の地域社會における知の能力の形成と家庭環境――水心文集墓誌銘の分析から――」（宋代史研究會編『宋代人の認識――相互性と日常空間――』、汲古書院、二〇〇一年）。なお、地域社會史の視點からの宋代溫州分析の先驅的業績としては、伊原弘「中國知識人の基層社會――宋代溫州永嘉學派を例として――」（『思想』第八〇二號、一九九一年）があり、また水利・移住の問題を扱ったものとしては本田治「宋元時代溫州平陽縣の開發と移住」（中國水利史研究會編『佐藤博士退官紀念中國水利史論叢』、國書刊行會、一九八四年）、同「宋代溫州における開發と移住補論」（『立命館東洋史學』第一九號、一九九六年）がある。永嘉學派の思想内容と思想家の事績については、周夢江著『葉適與永嘉學派』（浙江古籍出版社、一九九二年）、同『葉適年譜』（浙江古籍出版社、一九九六年）、同『葉適評傳』（作家出版社、一九九八年）が詳細である。

（13）南宋末期以後、官學となっていく朱子學についても、最近では、市來津由彦氏が朱熹の言葉を「その交遊者、門人の違和感、共感、質問等との協同作業によってつむぎだされた言葉」とする視角から興味深い考察をおこなっている（市來津由彦著『朱熹門人集團形成の研究』、創文社、二〇〇二年）。

（14）宋代墓誌の史料としての性格については、近藤一成「王安石撰墓誌を讀む――地域、人脈、黨爭――」（『中國史學』第七卷、一九九七年）、陶晉生著『北宋士族――家族・婚姻・生活』（中央研究院歷史語言研究所、二〇〇一年）などを參照されたい。

（15）中砂明德「唐代の墓葬と墓誌」（礪波護編『中國中世の文物』、京都大學人文科學研究所、一九九三年）。

（16）Beverly J. Bossler, *Powerful Relations: Kinship, Status, & the State in Sung China (960-1279)*, Harvard University Press, 1998.

（17）『水心文集』の編纂年次は不明であるが、既に宋末の陳振孫（一二五一沒?）『直齋書錄解題』にも掲載されている（周學武著『葉水心先生年譜』、大安出版社、一九八八年）。

（18）歐陽脩の墓誌執筆については、劉若愚著『歐陽修研究』

（臺灣商務印書館、一九八九年）、參照。

（19）墓誌の執筆對象者についてのデータは、拙稿「南宋期の地域社會における知の能力の形成と家庭環境——水心文集墓誌銘の分析から——」（前掲）に表として示している。無官の者だけでなく、單に贈官をされただけの者も十一名含まれており、それを加えると、三十九名（三〇・五％）となる。ただし、無官の者といえども、しばしば血緣に任官者が含まれていることも既に指摘しておいた。

（20）陳傅良『止齋先生文集』では、墓誌・壙誌の計三十六首から女性の五首をのぞいた三十一首のうち、なんらかの形で官職・官位を得た者の墓誌・壙誌は十三首であり、殘りの十八首は無官の者の墓誌・壙誌である。

（21）ボズラー氏の言葉を借りれば、墓誌等に顯著に見られた「誰が描かれたかについて變化」（a change in *who* is described）ということになる（Bossler 前掲書、三十三頁）。

（22）葉國良「論韓愈的家墓碑誌文」（『古典文學』第十集、一九八八年）。この論文の存在は、宇部工業高等專門學校一般科講師の畑村學氏よりご教示いただいた。ここに記して謝意を表したい。

（23）『居士集』卷二十四「石曼卿墓表」、卷二十七「張子野墓誌銘」・「孫明復先生墓誌銘」、卷二十八「蔡君山墓誌銘」・「黃夢升墓誌銘」・「薛質夫墓誌銘」・「尹師魯墓誌銘」、卷三十三「梅聖俞墓誌銘」・「江鄰幾墓誌銘」。

（24）薛季宣も、「余仲美墓誌銘」（『浪語集』卷三十三）、「林南仲墓誌銘」（同書同卷）のように、墓誌の題に字を用いる場合があった。

（25）王十朋が學生を朋友と見なしていたことについては、鄭定國著『王十朋及其詩』（臺灣學生書局、一九九四）、參照。

（26）藤川正數「「朋友」考」（『櫻美林大學中國文學論叢』第八號、一九八二年）。

（27）『水心文集』卷二十五「陳民表墓誌銘」。

（28）王十朋は「四友錄」（『梅溪先生文集』前集卷十八）にて、『論語』顏淵第十二の「君子は文を以て友を會し…」という言葉を引用しつつ、自分には四人の友がいるとして、「羅文」「毛穎」「楮先生」「子墨」を擧げている。それぞれ硯、筆、紙、墨を指しているのだが、これらを「四友」と稱するところにも、「友」と學問とのかかわりの深さが垣間見えるかのごとくである。

（29）『論語』季氏第十六に、「益者三友、損者三友あり。直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり。」とある。

（30）『水心文集』卷七「林叔和見訪道舊感歎因以爲贈」、卷十七「沈仲一墓誌銘」、同卷「黃子耕墓誌銘」、『梅溪先生文集』後集卷十二「送元章改漕成都」など。

（31）南宋の科擧は、おおむね詩賦科と經義科のいずれかを選擇させる方法がとられていた（古林森廣「宋代の受驗參考書（前編）——その必要性——」『明石工業高等專門學校紀要』第十九號、一九七七年）。

（32）王十朋の生涯については、徐順平著『王十朋評傳』（甌

越文化叢書之四、作家出版社、一九九八年）に詳しい。

（33）川上恭司「科擧と宋代社會――その下第士人問題」（『待兼山論叢』史學篇二十一、一九八七年）、參照。

（34）なお、ここで擧げた溫州出身の思想家たちが、こうした斷片的な用例――用例の數自體はたいへん多いが――と別に、何か「友」についてまとめて論じている長い文章が見られるわけではないが、葉適は「草廬先生墓誌銘」（『水心文集』卷十九）において、現世ではなく古人を友とする「尙友」說（孟子）を批判しているのは、事功派としての彼の獨自性を少しにおわしているように思う。後世の朝鮮でやはり「尙友」論を批判した朴趾源（一七三七～一八〇五）も實學者として知られる人物である（小川晴久著『朝鮮文化史の人びと』、花傳社、一九九七年）。

（35）血緣が確認できないが名前から考えておそらく薛季宣の薛氏と同じ一族であるとみなしてよい者も、少なくとも五名おり、あわせると二十一名の進士合格者が宋代にいたものと推定できる。前揭「南宋期溫州の地方行政をめぐる人的結合――永嘉學派との關連を中心に――」、參照。

（36）前揭『王十朋評傳』、參照。

（37）宮澤知之「宋代先進地帶の階級構成」（『鷹陵史學』十、一九八五年）によると、南宋の嘉定九年（一二一六）ごろに買い上げ對象として想定された八鄕二十都のうち、四百畝以上が四十九都、百五十～四百畝が二百六十八戶、三十～百五十畝が千六百三十六戶であった。

（38）前揭『葉適與永嘉學派』第六章「承先啓後的陳傅良」、參照

（39）前揭『葉適評傳』、參照。

（40）前揭「南宋期溫州の名族と科擧」、參照。

（41）『萬曆・溫州府志』卷十・選擧志、『嘉靖・瑞安縣志』卷七・選擧志、および、『建炎以來繫年要錄』卷百七十一・紹興二十六年正月癸丑の條、『同』卷百七十五・同年十一月丙申の條。

（42）『水心文集』卷十五「沈元誠墓誌銘」。

（43）「表二」の中で唯一、「友」と呼ばれた本人より上の世代に官職をもつ人のいるのが、葉適の「友」の戴溪（？～一二一五）であるが、彼の一族も「世々鄕の著姓爲り」（樓鑰『攻媿集』卷百七「戴俊仲墓誌銘」）とされている。

（44）Robert P. Hymes, *Statesmen dnd Gentlemen: The Elite of Fu-chou, Chiang-Hsi, in Northern and Southern Sung*, Cambridge University Press, 1986.

（45）『萬曆・溫州府志』卷十・選擧志、および、『光緒・永嘉縣志』卷十一・選擧志。

（46）前揭『葉適年譜』・『葉適評傳』、參照。

（47）兄の林鼐に對しては、「祭林伯和文」（『水心文集』卷二十八）、「林伯和墓誌銘」（卷十五）を、弟の林㮚に對しては、「祭林叔和文」（卷二十八）、「草廬先生墓誌銘」（卷十九）を撰している。この「林伯和墓誌銘」に、「余は年未冠にして、伯和兄弟を識る」と葉適は記している。

（48）寺地遵「南宋末期台州黃巖縣事情素描」（『唐・宋間における支配層の構成と變動に關する基礎的研究』、科學研究

費補助金總合研究研究成果報告書、一九九三年）、參照。

（49）『光緒・黃巖縣志』卷十四・選舉志の戴舜欽の條の割注、參照。

（50）潘美月著『宋代藏書家考』（學海出版社、一九八〇年）にも、一族の蔡瑞の名で登場しており、蔡鎬はその從孫にあたる。

（51）前掲『葉適年譜』乾道六年庚寅の條、參照。

（52）『水心文集』卷十四「姚君俞墓誌銘」。

（53）『水心文集』卷十四「楊夫人墓表」。

（54）前掲『葉適與永嘉學派』第八章「陳亮永嘉之行及其與永嘉學派的關係」、參照。

（55）吳春山著『陳同甫的思想』（國立臺灣大學文史叢刊、一九七一年）、參照。

（56）潘富恩・徐餘慶著『呂祖謙評傳』（南京大學出版社、一九九二年）

（57）『宋史』卷四百三十六・陳亮傳に「家は僅かに中產」と記されている。

（58）徐規・周夢江「試析陳亮的鄉紳生活」（宋史研究叢書『宋史論集』、中州書畫社、一九八三年）、參照。

（59）前掲『宋代藏書家考』に「南宋末期藏書家」十六人のうちの一人として衞湜の名が擧げられている。

（60）前掲『宋代藏書家考』には擧げられていないが、方建新「宋代私家藏書補錄（上）」（『文獻』一九八八年第一期）に擧げられている。

（61）『水心文集』卷二十四「滕季度墓誌銘」。

（62）『水心文集』卷二十「文林郎前祕書省正字周君南仲墓誌銘」。

（63）『水心文集』卷十二「周南仲文集後序」。

（64）興化軍莆田の劉氏一族については、中砂明德「劉後村と南宋士人社會」（『東方學報・京都』第六十六册、一九九四年）に詳しい。

（65）前掲『葉適年譜』では、隆興二年（一一六四）、葉適が十五歲の頃のことであろうとしている。

（66）樓鑰『攻媿集』卷七十七「書陳止齋所作張忠甫墓銘後」に、「乾道七年、東嘉に客授し、一時の賢士に從いて遊ぶを獲」と記されている。

（67）袁燮『絜齋集』卷十一「資政殿大學士贈少師樓公行狀」。

（68）この場合は、「衞、偶々永嘉に來たり、余に見えて舊事を言い、相い對して嘆息す」（『水心文集』卷十七「胡崇禮墓誌銘」）とあるから、この時點で既に舊知の間柄であったと見られる。既に葉適、六十四歲の冬のことである。

（69）宋代の人的結合における「同年」については、最近發表された山口智哉「宋代『同年小錄』考――『書かれたもの』による共同意識の形成――」（『中國――社會と文化』第十七號、二〇〇二年）に詳しい。

（70）『水心文集』卷二十七「上執政薦士書」。

（71）『宋史』卷四百三十四・葉適傳。

（72）官とは無緣の家の知識人について、本稿で扱った史料とは別のもので、近隣地域の事例を一つ擧げておきたい。浙江省溫嶺縣（宋代の行政區畫では台州黃巖縣）から出土し

た鄭士元（一一七八～一二五四）の墓誌、すなわち「宋雲林隱士鄭公墓誌」（台州地區文物管理委員會・台州地區文化局編『台州墓誌集錄』、一九八八年）によると、隱士の鄭士元の曾祖父・祖父は「隱德有り」とあるのみで、父は早世し、いずれも官職はなく、また本人、男子、女子の夫、男孫のいずれも官職は確認できない。ただ、鄭士元が若い日に「京庠」（臨安府學）に遊學したとあり、また、長子鄭荃らについて、「荃等、儒業を繼ぐ」とあるように、少なくとも二代にわたって學問を續ける家庭ではあったものと見られる。その鄭士元の長子から「父の平生義を行うを痛く念い、惟だ谷翁のみ之を知ること詳らかなり」として墓誌の撰述を依賴された谷翁が「余、其の言を聞きて、悲しみに勝えず。辱じけなくも友朋に在りて義有るを念う。辭すれば則ち非情なり」として、鄭士元が「友朋」の間で義の行いある人物であったことを記している。名のある人物が書いたのではない墓誌だが、そこでも「友」に關する用例はやはり見出すことができる。

（73）前揭『宋代藏書家考』、參照。

（74）『嘉泰會稽志』卷十六「藏書」には、「越の藏書に三家有り、左丞陸氏、尙書石氏、進士諸葛氏なり」として、北宋末期の兵部尙書石公弼以來の藏書の家として擧げられている。この新昌石氏については、前揭『北宋士族――家族・婚姻・生活』第十一章「教育與興盛――新昌石氏」に詳しい。

（75）井上進著『中國出版文化史――書物世界と知の風景――』（名古屋大學出版會、二〇〇二年）。本稿との關わりでは、とくに第十章「特權としての書物」が興味深い。また、傅璇琮・謝灼華主編『中國藏書通史』上册（寧波出版社、二〇〇一年）第五編「宋遼夏金元藏書」（方建新ら執筆）にも數代にわたる藏書世家の例が列擧されている。

（76）伊東倫厚「魏了翁」（『朱子學大系　第十卷　朱子の後繼（上）』、明德出版社、一九七六年）、參照。魏了翁は本稿に登場した平江府の衞湜の『禮記集說』の序も執筆している。

（77）この場合の「永嘉」は、永嘉縣ではなく、溫州全體を指す。

（78）王十朋は「東嘉は多士と號す」（『梅溪先生文集』前集卷九「和燕河南府秀才送周光宗」）として、溫州の別稱「東嘉」という語を用いて同樣のことを述べている。

（79）葉適自身による「永嘉之學」という語の用例は、『水心文集』卷十「溫州新修學記」に見える。

（80）魏了翁が、陳傅良の門人で同年進士でもあった瑞安縣出身の蔡幼學（一一五四～一二一七）の子蔡範に送った詩である。

（81）なお、南宋期のもう一つの溫州文化とも言うべきものに、溫州で始まった「南戲」がある。民間の娛樂であった南戲ではあるが、その戲曲の中ではしばしば科擧の狀元が、男性の主役になっており（金文京「南戲和南宋狀元文化」、溫州市文化局編『南戲國際學術研討會論文集』、中華書局、二〇〇一年）。そして本稿で取り上げた王十朋も、『荊釵

記』でヒロイン錢玉蓮と最後に結ばれる狀元として登場する――玉蓮の存在や話の筋は虚構だが――。こうした南戯に象徴される文化と、本稿で取り上げたような士大夫中心の文化とが、温州という一つの地域社會の中に共存していたわけであるが、兩者の連續性と非連續性については、別の機會に論じたい。

〔附記〕本稿は、平成十四年度科學研究費補助金（基盤研究（B）（一）「宋代以降の中國における集團とコミュニケーション」）による研究成果の一部である。

regarding payments in lieu of *yaoyi*, a just burden was determined according to the individual citizen's capacity, as was the case in the payment of the *jintieyin* 津貼銀. In addition, concerning the actual labor, *shiyi* 實役, the burden was not determined mechanically, but the amount of the burden was allotted only after the weight of the year's total tax was taken into account. Also, the tax of members of a branch was reduced whenever possible, and priority was given to payment of the tax by joint-shouldering of the *yaoyi*. This sort of payment technique signifies that the basic conditions, the group's centripetal tendency and the fairness of the payments decided within the group were guaranteed internally by the *zonghu's* unbiased views and fair treatment. As a final point, in respect to the aspect of the relationship between the kinship organization and the nation, the nation's intent to enforce the *zhangliang* 丈量, the measurement of taxable land, was first conveyed to the two branches of the Taoyuan-hong clan, i.e., the Xianggong-fang and Shougong-fang. These two branches then launched into concrete talks within their respective groups about how to shoulder the tax among themselves in accordance with the agreement of the two branches. Moreover, it can be seen from the transcripts of the election of the *duzhang* 都長 and the leader of the *tuanlian* 團練, i.e., the *xiangzong* 鄉總 and the *lianfu* 練副, the intent of the state was first notified to the *lijia*, and it was debated by the four *xiangyue* 鄉約, communities organized by compact, which were based on four natural villages, that formed a single unit, the administrative entity called Wudu 五都. However, at the same time, the *xiangyue* at Zeshucun, the 檡墅約, was a *xiangyue* constituted of the Taoyuan Hong. As a result, it has become clear that the clan and the state were directly linked because the *lijia* organization and the *xiangyue* were formed from the kinship organization.

THE SIGNIFICANCE OF THE WORD YOU IN A LOCAL SOCIETY OF THE SOUTHERN SONG

OKA Motoshi

How the word *you* 友 was employed is analyzed in this article in order to clarify personal bonds in the local society of the Southern Song dynasty.

In this article, I have scoured the writings of Wang Shipeng 王十朋, Xue Jixuan 薛季宣, Chen Fuliang 陳傅良, and YeShi 葉適, four individuals who lived in Wenzhou 溫州 during the Southern Song, determined whom was called *you*, and

entered the results in a chart. Then, having confirmed their meaning of the word *you*, I analyzed what were the relationships between those termed *you* and the writers, and what were the positions of each in local society. The following points have been made clear by this analysis.

First, with those whom were termed *you*, the writers maintained close long-term relationships whether they were local people or officials there on assignment. Calling someone *you* was never a frivolous matter.

Secondly, the relationship between the people termed *you* was often formed between fellow students in an academic setting and developed mutually thereafter. The polemics conducted between *you* sometimes caused alterations in the thought of one or the other party.

Thirdly, among these *you*, there often appear those who held no government office and those whose ancestors were not office holders. However, there were many from celebrated families who had built up their status in local society, and among these were some who had been bibliophiles and collectors of books for generations.

As a result of this analysis, Wenzhou during the Southern Song was region that epitomized this trend, which was by no means limited to Wenzhou.

ON THE HISTORY OF THE GLING TSHANG PRINCIPALITY OF MDO KHAMS DURING THE YUAN AND MING DYNASTIES

WEIRONG Shen

The history of the Gling tshang principality, one of the eight religious principalities in Tibet during the Ming dynasty, has attracted scholarly attention several times in the past. However, there are many issues that remain obscure due to a lack of sources. This article attempts to shed new light on these unresolved questions by employing new sources in the *Ming Shilu* and by comparing the Chinese and Tibetan sources. Following a brief description of Gling tshang's location and history, a detailed discussion is made on the real meaning of the phrase *bod kyi chol kha gsum*, dpon chen in Tibetan historical sources and its relation to *xifan sandao xuanwe si* in order to explain why the Gling tshang was chosen to be conferred the status of a religious kingship by the Ming court. The conclusion of the discussion suggests strongly that the Gling tshang had already enjoyed high status and authority as *mDo smad dpon chen*, possibly, i.e., the *mDo smad xuan wei shi*